

【学部長賞受賞論文】

# 理想的なコミュニティを生み出す地域性と 共同性の要件

—— 宮城県名取市箱塚桜団地仮設住宅を事例に ——

佐藤 航太・大内 千春・高橋 智美\*

はじめに

2011年3月11日午後2時46分に発生した三陸沖を震源とする東日本大震災は、日本国内観測史上最大のマグニチュード9.0を記録した。それに伴う建物被害や、さらに大地震により発生した津波は東北地方をはじめとする太平洋沿岸部に壊滅的な被害をもたらし、被災者の多くは仮設住宅への入居を余儀なくされた。本論文の調査地である箱塚桜団地仮設住宅（以下当該地）は、宮城県名取市の沿岸に位置する閑上上町地区の人々が入居しており、この地区も壊滅的な被害を受けた。

当該地は「仮設住宅でのコミュニティ形成の1つのモデルケース」と呼ばれ、住民同士の交流が活発な仮設住宅である。コミュニティは様々な意味で捉えられているが、ここで定義するコミュニティとは「地域性」、「共同性」、「地域社会感情」を要件とするものである（宇都宮，2006）。当該地の震災以前のコミュニティをみると、この3つの要件を満たしていなかった。このことから、当該地がコミュニティ構築に積極的に取り組んでいたわけではないことがわかる。ところが、震災以後は3つの要件が必要上高まったことから、3つの要件を十分に満たすコミュニティ形成のモデルケースとまで呼ばれるようになった。まさに理想的で充実した生活を送っている現実が見える。

この理想的なコミュニティを、フィールドワークを通じて「地域性」、「共同性」、「地域社会感情」の3つの要件から具体的に分析する。そして、なぜ仮設住宅の期限である2年という制約された時間の中で、人びとは生活の基盤をコミュニティの理想像とも呼べる在り方に身を置いて生活を送るようになったのかを明らかにしていく。結論を先取りしていえば、「まちの再出発」を促していくようなエンジンとしての機能をコミュニティに託したために、

---

\*指導教員：金菱 清

これほどまでに充実したコミュニティを再構築させるものになったのではないかとみている。このことを明らかにすることによって、大震災以後、まちを再出発させるためにはどのようなコミュニティの在り方が必要なのかという実践的な関心から以下論じてみたい。

第1章では、過去の日本で発生した震災により生じた仮設住宅の事例とコミュニティの定義として地域性、共同性、地域社会感情の3つの要件を挙げる。過去の災害仮設住宅の研究史をみていくことで、仮設住宅内のコミュニティに関する問題点を明らかにし、当該地のコミュニティが特異であることを確認していく。

第2章では、当該地に入居する人々が震災以前に生活していた名取市閑上地区の概要を記述し、閑上地域の震災による被害、また当該地・箱塚桜住宅の概要を確認し、理想的なコミュニティ形成の経緯を見ていく。当該地での特徴的な活動として、① 様々な世代を取り込んだ自治会運営、② 「孤独死・自死ゼロ」を目指す草の根運動、③ 日常生活や「イ・シヨク・住」を支えるアプローチ、の3点を挙げ、これらが理想的なコミュニティ形成の重要な要因となったことが分かった。これが土台となり、当該地では全世代の交流が活発なものとして顕著に表れている。

第3章では、コミュニティの定義から「地域性」を取り上げる。第2章で特徴的な点として挙げた「世代間交流」と、「箱塚桜団地」という愛称に着目し、そのことによって同じ空間にいるという「地域性」が高まったことを示す。

第4章では、コミュニティの定義から「共同性」を取り上げる。災害の経験により身に付いた災害に対する「適応策」と、自治会の目的であった「孤独死・自死のゼロ」から「元気なコミュニティ」への変化に着目する。そのことによって、当該地（自治会）において同じ利害や目的があるという「共同性」が高まったことを示す。

第5章では、コミュニティの定義から「地域社会感情」を取り上げる。災害に伴う「死」の問題に着目し、そのことが「地域社会感情」が高まった要因であると示す。

結語では、震災以前コミュニティ軽視をしていた住民が、なぜコミュニティに根差した生活を受け入れたのかを、「まちの再出発」という新たな視点から、災害時におけるコミュニティの必要意義を捉える。

はじめに

目次

## 第1章 災害仮設住宅のコミュニティの実情

### 1-1 コミュニティを定義する3つの要件

### 1-2 阪神淡路大震災仮設住宅の事例

- 1-3 新潟中越地震仮設住宅の事例
  - 1-3-1 新潟県川口町 T 地区の事例
  - 1-3-2 新潟県 44 カ所の仮設住宅事例
- 1-4 コミュニティ構築から見る仮設住宅の実情

## 第2章 新たな自治会の発足と住民のための仮設住宅づくり

- 2-1 宮城県名取市閑上地区概要
- 2-2 東日本大震災の名取市の被害と避難状況
- 2-3 調査対象地概要
- 2-4 新たな自治会の発足
- 2-5 全住民へ向けての多様な取り組み
  - 2-5-1 様々な世代を取り込んだ自治会運営
  - 2-5-2 「孤独死・自死ゼロ」を目指す草の根活動
  - 2-5-3 「イ・ショック・住」を支えるアプローチ

## 第3章 コミュニティにおける「地域性」

- 3-1 桜団地という名称がもたらした所有意識
  - 3-1-1 日常的に使われる「桜」の名称
  - 3-1-2 地域性を高めた「団地」の存在
- 3-2 地域性を高める「世代間交流」
- 3-3 地域性を高めた要因

## 第4章 コミュニティにおける「共同性」

- 4-1 「元気な」コミュニティへのシフトがもたらす共同性
- 4-2 理想的なコミュニティの意味づけ
  - 4-2-1 理想的なコミュニティとは
  - 4-2-2 理想的なコミュニティがもたらしたもの
- 4-3 イレギュラーな事態がもたらした住民主体性
- 4-4 閑上上町地区の災害に対する「適応策」
- 4-5 共同性を高めた要因

## 第 5 章 コミュニティにおける「地域社会感情」

- 5-1 干渉されない生活から干渉を「受け入れる」生活への変化
- 5-2 人々を取り巻く災害の〈死〉の存在
- 5-3 地域社会感情を高めた要因

### 結語 「まちの再出発」というコミュニティの捉え方

## 第 1 章 災害仮設住宅のコミュニティの実情

日本では過去にも東日本大震災のみならず、地震による被害で仮設住宅への入居を余儀なくされた方々が存在する。ここではコミュニティを定義する 3 つの要件を取り上げていく。その上で、以前に発生した震災の仮設住宅の研究史をみていくことで、仮設住宅内のコミュニティに関する問題点と今後の課題を明らかにし、仮設住宅でのコミュニティ構築がいかに困難なものであるということを論じる。

### 1-1 コミュニティを定義する 3 つの要件

本論文では、当該地におけるコミュニティに着目し分析をしていく。そこでまずコミュニティの定義について述べる。

コミュニティとは、一定の地理的範囲の中で共同生活を営む人々の集合状態を意味する。ここには、地域性（同じ空間にいる）と共同性（同じ利害や目的がある）というコミュニティの二つの要件がある。例としては、欧州共同体のような壮大なものや、日本の村落が挙げられる。特に日本の農山村集落は、水田に流れる水路の共有・管理、田植えや収穫の祭りなど村落住民に共通する利害や目的を通して、“おらが村”という「われわれ意識」を強く醸し出してきた。コミュニティの要件には、こうした地域社会感情もある。

本論文では、地域性、共同性、地域社会感情の 3 つの要件を有しているものをコミュニティの定義として捉えている。この 3 つの要件を十分に満たすほど、コミュニティがうまく機能しているといえるが、その特徴は、村落などに多くみられる。その要因としては、上記の水田の共有など土着性に関連している場が多い。対照的に、現代は生活時間・生活空間が個人ごとに分化し、興味、利害、価値観も分化していく生活である。このことから「みんな一緒に」という共同性も喪失することになった（宇都宮、2006）。

このように生活の個別化が浸透した社会が現代においては多くなっている。ゆえに、そのような生活を送ってきた人々に突如として襲い掛かる自然災害は、コミュニティにどのような問題をもたらすのであろうか。ここから、過去に発生した大震災の事例を取り上げていく。

## 1-2 阪神淡路大震災仮設住宅の事例

1995年1月17日に淡路島沖を震源とした阪神淡路大震災が発生した。建物被害などにより死者6,434名、行方不明者3名となった。以下は、阪神淡路大震災が発生した年から9年間神戸市内の仮設住宅の研究史である（高橋ほか、2005）。

阪神淡路大震災による仮設住宅は、移住地区を考慮せず抽選で入居者を決定し、集会所などの共同スペースも設置していなかったことが一因となり高齢者（特に独り身の高齢者）のような生活弱者の孤立、孤独死等の問題が生まれた。孤独死は阪神淡路大震災の被災地全体で233件、事例地では91件と顕著な問題であった。この問題での事例地である神戸市内の仮設住宅は、住民同士の共同スペースの有無がある仮設住宅により分れており、共同スペースがある仮設住宅の方が孤独死の発生率が低かった。また、共同スペースは規模の大きい仮設住宅に多く作られたことから、仮設住宅の規模が大きいほど孤独死者数が少ない。

仮設住宅の孤独死の居住環境は健康や生活に影響を及ぼしたと考えられている。阪神淡路大震災では、他の入居者と交流がない抽選による入居、入居後共同スペースがないことによって生じる孤独死の問題などからコミュニティ形成のための支援や見守り支援といったソフトの面を充実させるのが課題として挙げられた。また、入居者の年齢や生活を踏まえ、団地の規模や立地等を考慮した住宅供給を行う事も課題である。

## 1-3 新潟中越地震仮設住宅の事例

### 1-3-1 新潟県川口町 T 地区の事例

2004年10月23日発生した新潟中越地震では、震度7の激しい地震によって住宅を失い、仮設住宅での生活を強いられる例が多くみられる。新潟県は、地震から3日後に仮設住宅の建設を決定し、最終的に3,460戸建設した。事例地は、新潟県川口町 T 地区仮設住宅であり、地震発生後1カ月から12カ月にわたって調査をおこなったものである（浅野ほか、2008）。

仮設住宅の入居にあたって、地域コミュニティへの配慮として①集落ごとのまとめり②団地内の集会所や談話室等の設置を実施した。事例地の入居者は、居住年数が長く地域に定着した住民であった。そのため、仮設住宅に入居後1年を経過しても住民の93%が住み続けたい、または出来れば住み続けたいと答えた。仮設住宅の生活をしている上での心配ごととは今後の自宅再建への不安であったため、課題としては義援金の支給、住宅解体助成制度等の実益的な生活支援策であった。

### 1-3-2 新潟県 44 カ所の仮設住宅

事例地は、長岡市、小千谷市他8市町村の住戸総数が20戸以上の仮設住宅44カ所である

(長谷川ほか, 2007)。

事例地では、阪神淡路大震災で多く発生した孤独死を防ぐために、元々の集落単位で入居する方式が採用された。また、談話室を設営することが推奨された。2006年1月30日の地点で孤独死は確認できていない点から、コミュニティに対する配慮や支援は有効であったと推察できる。

また、仮設住宅内での情報が行き届かない状況を防ぐため仮設住宅内での仮設オープンカフェの実施が試みられた。この仮設カフェには、居住者に対して住みこなしに関する情報の収集と提供を一体的に行うことと、気軽に立ち寄ることのできるコミュニティ支援の場を提供することの2つの目論みがある。生活に対する支援を行いながら、居住環境改善の工夫や仮設住宅のコミュニティを明らかにすることが目的とされた。仮設カフェは、仮設住宅というサークルに一部付随した非日常的な空間だと言える。居住者は、「お茶が飲みたい」や「表札がほしい」など要望と目的は様々であった。このことから、仮設カフェは多様な居住者が集まることから居住者自身がほしい支援を積極的に入手していく能動的な支援方法であった。また、孤独死の発生を防ぐ有効な方法である。

#### 1-4 コミュニティ構築から見る仮設住宅の実情

2つの過去の震災の事例をみても、現在より16年前の阪神淡路大震災、7年前の新潟中越地震双方の仮設住宅運営には明確な相違点がみられる。

##### ① 阪神淡路大震災

高齢者や障害者といった生活弱者を優先的に入居させたことが仮設住宅の居住環境から健康や生活に影響を及ぼした。入居選定方法や運営など多種多様な面での課題が残り、その課題の背景には、居住環境の変化による孤独死を遂げる多くの犠牲者がいる。

##### ② 新潟中越地震

阪神淡路大震災の反省から、仮設住宅の居住環境の配慮をした仮設住宅での課題は、義援金の支給、住宅解体助成制度等の実益的な生活支援策であった。しかし、阪神淡路大震災の経験を踏まえた仮設住宅の運営であるのにも関わらず、必ずしも全ての仮設住宅が地区ごとの入居とはいかず、関連死が最終的に52人にも及んだ。

以上の事から、災害時に建設される仮設住宅は、被災者に対して失った居住地の提供を行う必要不可欠な場である。しかし、同時に、入居には様々なリスクを伴う。そのリスクとは、防寒対策などハード対策で解決されることばかりでなく、コミュニティの構築などソフト対策を有する問題も多い。そして、ソフト対策を必要とする問題の悪化は、孤独死など人間の「生」に関わる最重要な問題である。抽選を行わずに、地区でまとまった仮設住宅の入居や

共有スペースなどをすすんで実施し、過去の災害の教訓を把握して改善していくのが仮設住宅の居住環境の整備につながる。

今回の震災の仮設住宅の入居方法をみてみると、過去の震災の反省点があるのにも関わらず、土地の確保ができないなどの理由から抽選による入居方法をとった自治体も少なくない。しかし、過去の震災の課題を教訓に、コミュニティの構築などソフト対策を視野に入れ地区ごとの仮設住宅への入居を推進した自治体も増えている。また、自治体に運営をゆだねるのではなく仮設住宅内で進んでコミュニティ構築を図ろうという動きが顕著な仮設住宅もあるが、孤独死・自殺の問題も解決したわけではなく、容易なことではない。この点からみると、理想的なコミュニティを構築している当該地は特異であるといえるだろう。

## 第2章 新たな自治会と住民の為の仮設住宅作り

本章では、始めに調査地がある宮城県名取市閑上地区を紹介し、その後調査地である箱塚桜仮設住宅団地の説明、自治会活動の事例を紹介していく。その中で着目すべきである集会所活動や「孤独死・自死ゼロ」を目指す活動等を分析し、当該地の特色を見ていく。

### 2-1 宮城県名取市閑上地区概要

宮城県名取市は宮城県中部に位置し、仙台市や岩沼市と隣接している。名取川・阿武隈川の両水系に囲まれた肥沃な土地が広がり、気候も温暖なため自然条件に大変恵まれた土地である。

名取市の閑上地区は、仙台市の南側に隣接した海沿いの地域であり、赤貝の国内水揚げ量が1位を占めていた。食産関係では赤貝丼、さらに笹かまぼこや焼きかれいが有名である。



図1. 名取市閑上地区位置

夏になると「ゆりあげビーチ」に観光客が訪れ、市内でも観光資源に恵まれた地区であった。

閑上地区は震災により津波被害を受け、壊滅的被害となった。閑上地区は移転先の問題や漁業の存続等で住民同士の意見が割れたが同年11月21日にまちづくり組織を一本化させた。今後も話し合いを重ね行動に移していく予定である。

## 2-2 東日本大震災の名取市の被害と避難状況

東日本大震災により生じた大津波は、宮城県名取市閑上地区で9M以上を超える大津波となって押し寄せた。当該地区はほぼ全域が津波により甚大な被害を受け、667人が犠牲となった。名取市全体で死者・行方不明者は967人にのぼっている。住宅被害は名取市全体で全壊2,806棟、半壊1,060棟、一部損壊は9,711棟である（2012年1月4日現在）。内陸部は地震により屋根瓦の崩落等の倒壊などの被害が見られ、沿岸部は津波により家屋が流出する被害が多数を占めている。

名取市における避難所の数は震災直後の3月12日の時点で避難所が52箇所、避難者は11,223人にのぼった。閑上地区の住民は同市内の館腰小学校、高館小学校などに避難した。避難者は個別にアパートや県内外に移住したり、仮設住宅に移るなど徐々に人数は減少し、避難所は6月22日に全て閉鎖された。仮設住宅は名取市内に8箇所、969戸が完成し、2,182人が入居している（2011年9月末現在）。仮設住宅への入居は市の方針により、被災前の居住区域を中心に振り分けられている。

名取市における仮設住宅の詳細は以下のとおりである。

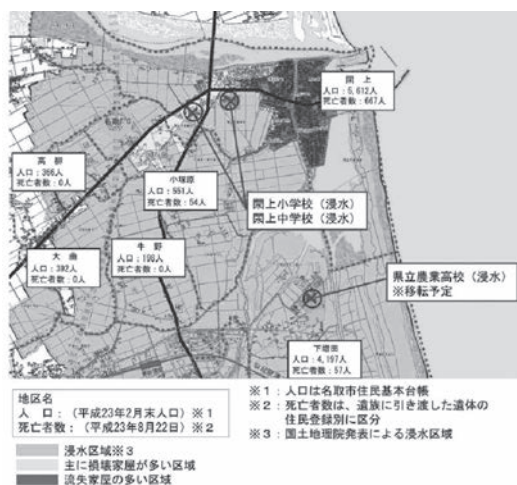


図2. 名取市沿岸浸水状況分布（閑上地区中心に抜粋）



表1. 名取市内の仮設住宅一覧

仮設住宅団地名称 (旧名称)	戸数
箱塚桜 (県立精神医療センターグラウンド)	102
箱塚屋敷 (箱塚グラウンド)	180
美田園第1 (下増田前田地区)	128
美田園第2 (下増田飯塚地区)	120
美田園第3 (下増田小学校グラウンド)	27
愛島東部 (愛島東部第二区画整理地)	182
植松入生 (NTTグラウンド)	150
雇用促進住宅愛島宿舎	80

### 2-3 調査対象地概要

大地震に伴い発生した大津波を経験した名取市閑上地区の人々は、避難所を経て、仮設住宅での生活に移った。以下、上町地区の人々が入居する箱塚桜仮設住宅の概要をまとめ、理想的なコミュニティが形成した経緯をみていく。

宮城県名取市の西部に位置する箱塚桜住宅は、入居者は102世帯、258人である(2011年12月末現在)。2011年5月3日に入居が始まり、同年5月8日に自治会が発足した。当該地は、入居方法が無作為に抽選で選ばれるものではなく、上町地区の方が入居する「地区ごと」でのまるごと入居となっている。

ここで、「地区ごと」にふり分けられた上町地区の人々の震災以前の生活についてみていく。上町は閑上1丁目と2丁目の一部からなっており、2011年2月末の時点で467世帯1,351



図3. 箱塚桜仮設住宅位置 (矢印は震災前からの移動を示す)

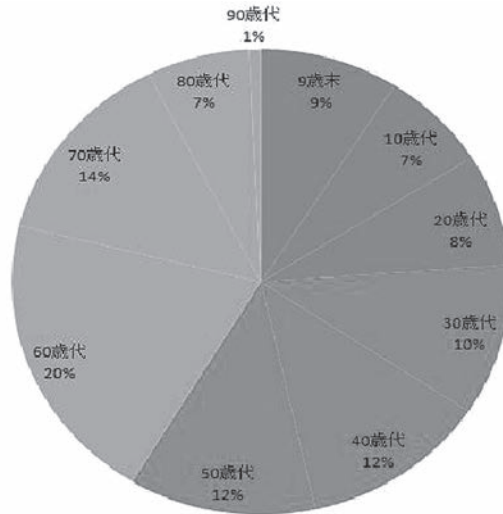


図4. 箱塚桜仮設住宅年齢グラフ

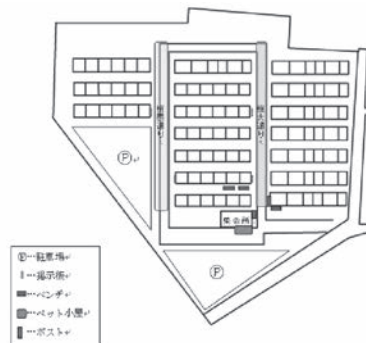


図5. 箱塚桜仮設住宅内地図

人が上町に住んでいた。上町町内会では、回覧板が配布されていたが、真剣に読む人は少なかったようだ。また住民はあまり町内会の役員になりたがらないといった傾向もあった。そのような地区、いわゆる「コミュニティが弱い」と揶揄されてきた人々が入居する当該地であるが、現在自治会を中心に様々な行事が行われておりメディアからもコミュニティ形成に成功しているモデルケースと紹介される事が非常に多い。

箱塚桜団地仮設住宅に入居されている方々の年齢層は、下記のとおりである。入居者の約3分の1の65歳以上の高齢者で占めている高齢層を中心とした自治会である。

図5は仮設住宅内を図で示したものになっている。

## 2-4 新たな自治会の発足

前項では仮設住宅への移動経緯や図で説明したが、ここでは箱塚桜仮設住宅団地に発足した自治会について記述していく。

閑上公民館元館長を歴任していた大脇兵七さんが自治会長となり、当該地の自治会、「箱塚桜団地自治会」が発足した。発足当初のメンバーは自治会長の大脇兵七さん、総務担当の橋浦正志さん会計担当の大友吉彦さん、行政担当の太田光朗さん、学校担当の片平秀樹さんの計5名からのスタートであった。

自治会メンバーのその他にも、住民の声や一人ひとりを把握することを目的に、2棟に1人若い年齢層から班長を選出し、班の要望や苦情、体調管理を行っている。箱塚桜自治会メンバーは、70歳代を中心としているが、自治会の設立後初めての仕事は、支援物資の仕分け作業という力を要するものであった。そこで、大脇会長は、班長は若い年齢層から出すことを決めた。

その後自治会は、大脇会長の提案や先導の元、様々な運動や会合、仕組みが作られていくことになる。次項ではその運動等を自治会からの住民に対する多様な取り組みとして捉え、3つに分類し、説明していく。

## 2-5 全住民へ向けての多様な取り組み

5月8日の仮設住宅に入居後、避難所生活から解放された住民の多くが安心感を覚え、当初は籠ってしまう住民が多くみられた。大脇会長は阪神淡路大震災の仮設住宅での「孤独死・自殺者」の増加、またアルコール依存症の拡大が多くみられた事を思い出し、現状に危機感を感じた。

そこで自治会は、引き籠りがちな現状を打破するために「孤独死・自死ゼロ」「アルコール中毒者を出さない」を目標に自治会運営をスタートさせる。当該地では自殺者とは呼ばず、自死と呼ぶことから、本論文では今後「自死」と記述していくこととする。

ここからは箱塚桜団地自治会が行った特徴的な自治会運営である。その活動を大きく3つに分類し記述していく。

### 2-5-1 様々な世代を取り込んだ自治会運営

箱塚桜仮設住宅団地の入口側に設置された集会所は、常時自治会によって管理されており、住民によって自主的に使える環境が整えられている。これは仮設住宅が開設した当初から始まっており、最初は支援物資の荷物置場として利用され、徐々に集会所としての本来の機能を果たせるようになっていった。



写真1 行事がびっしり詰まった予定表

写真1は集会場に置いてある予定表であるが、ほぼ毎日集会所が使われている。これ以外にも空いている時間にお茶のみであったり、子どもが本や漫画を読む遊び場としても機能している。

はじめにボランティア団体「てんしのわ」が主催している①「ティールーム」、②「チャイルドパーク」そして③「チャイルドパークティールーム」を取り上げていく。

「てんしのわ」とは宮城県仙台市在住の主婦層が中心になって組織した、スタッフ約20名のボランティア支援団体である。2011年4月から閑上地区の人々が避難していた館腰小学校にて活動を開始、高齢者を中心に平日お茶や食べ物を用意し、会話を出来る場として「ティールーム」を開設・運営してきた。6月からは避難所閉鎖に伴い、箱塚桜団地にて活動を再開。引き続き「ティールーム」「チャイルドパーク」活動等の支援を行ってきた。

①「ティールーム」とは避難所で行ってきた活動とほぼ同じであり、毎週1回午前中に行ってきた活動である。集会所で行われ、引き籠もりがちであった高齢者を対象に、お茶を飲んだり、世間話をしたり、心の中にある不安を取り除く目的で引き続き行われていた。

そして同じ時期に、同じ場所で②「チャイルドパーク」という取り組みも行われていた。こちらは仮設住宅団地内の未就学児を対象としたものであり、具体的内容は子供の遊び場を提供していることである。特筆すべき事はスタッフだけでなく、仮設住宅内の子供の母親が交代制でシフトを組み、周りの子供全員の面倒を見ているというシステムである。これにより、母親たちの休日が出来、子育てから一時的に解放されることによって、ストレスの発散にも繋がる。

「ティールーム」と「チャイルドパーク」の合同イベント等を通し、お年寄りが子どもの遊びや、工作などに「さっぱめる」ようになっていった。ここで出てくる「さっぱめる」とは仙台弁であり、「口をだす」という意味である。子どもの行動にお年寄りがちょっかいをかけ、子どももお年寄りを意識するようになっていった。次第に、お年寄りが子どもの面倒・遊び相手という立場になり、また子どもも同様にお年寄りを気遣っていくようになっていっ

た。大協会長は「小さな町の博物館」と高齢者を称していた。それは、子どもたちが自然と高齢者と触れ合う機会を得て、高齢者から様々な事を学び、交流するようになっていったのである。また子どもたちの笑顔や笑い声は高齢者にも笑顔を与えた。それを大協会長は「勇気と希望」と称し、自治会の雰囲気向上に繋がっていった。この出来事を見た大協さんは自治会からの提案として、「ティールーム」と「チャイルドパーク」を一緒に行うようにして、③「チャイルドパークティールーム」を設置した。この集まりが日常化されるようになり、集会所で子どもと高齢者のふれあいが日常的な物になっていった。それは自発的にさまざまな集会所へ来るようにさせたものになった。

上記の「チャイルドパークティールーム」はボランティア団体と自治会の意見を合わせて誕生したイベントである。自治会は世代間交流・集会所活発的な利用を促進させた。

しかしながら、自治会の出来る範囲にも限界があり、自分たちでは解決できない問題として子どもへの勉強支援、心のケア等の問題が有った。そこで大協会長は、ボランティアに全てを委託するのではなく、自分達のニーズにあったボランティアを受け入れることや、提案していく事で、問題の解決を図ろうとしていた。上手くボランティアを取り込み、集会所を機能させていった。

箱塚桜団地自治会は「自立」を目指して、その中心として集会所での活動を活発化している。その中でどうしても補えなかったりする部分を、上手く外部とのボランティア・NPO団体を取り組み、活動の起点としている。また集会所以外にも子供達に外で、自分達のスペースとして遊んでもらいたいという思いを込め、仮設住宅内の中央通り、通称「桜大通り」、また西側の大通り、通称「桜西通り」を6月初旬から午前11時から午後5時までの時間を制限して車の出入りを禁止し、子どもたちの遊び場とする「ちびっこひろば」を開設した。また、「ちびっこひろば」になっている桜大通り、西通りに沿うようにベンチが設置されている。このベンチは仮設住宅内に、15カ所に設置されており、高齢者を中心に座って話している光景がみられた。ベンチはちびっこひろばを見渡せるように意図して設置しており、これが「チャイルドパークティールーム」のように、高齢者と子供の日常的な触れ合いを実現させている。



写真2. ベンチを利用する人々

## 2-5-2 「孤独死・自死ゼロ」を目指す草の根活動

前項で「チャイルドパークティールーム」といった子供や高齢者を集会所に呼ぶ事で、家に極度の引き籠り状態にさせないという取り組みを紹介してきた。しかしながら、当然その活動に参加しない居住者や住民も多くおり、全員が自主的に自治会や集会所の活動に積極的な参加を見せているわけではない。若年層の家族や、また65歳以上の1人きりの高齢者が自宅に引き籠り、付近の住民と交流を持たないというのはこの仮設住宅でも例外では無かった。ここでは、住民に対するアプローチ、情報伝達手段を記述していく。

### ① 掲示板によるアプローチ

箱塚桜団地には、掲示板が敷地内に5カ所に設置されている。この掲示板は当該地独自で設置したものであり、名取市で設置されている掲示板は仮設住宅内の入口にあるが、ほぼ使われず、目を向けている住民は少ない。一方、当該地の掲示板は集会所で開かれる活動の情報などがメインである。それ以外にも外部のボランティアやNPO団体主催のイベントのポスターが貼られており、積極的なアピールを行っている。

### ② 回覧板によるアプローチ

上記の掲示板によるアピールを行っているとはいえ、掲示板に目を通す習慣がすべての住民にあるわけではない。また掲示板の情報は充実しているが故に、全ての情報に目を通しにくいのも事実である。

回覧板も元々は薄いファイルに挟んでいたが、効果が薄かったため、大協会長は工夫を加えた。回覧板を分厚いファイルにし、今までの情報が全て詰まっている非常に大きいものへ変化させた。また回覧板の表紙には方言でかつて流行した懐かしい歌を添えてある。結果、住民たちの購読意識が高まる。

### ③ メガホンによる呼びかけ

掲示板、回覧板で行事について呼びかけても、それでも興味関心をまるで持たないという人は多くいるという。今までは事前に知らせる手段であったが、メガホンは当日に行う行動であり、直接的な呼びかけになっている。

メガホンによる呼びかけは、集会所でのイベントや避難訓練の際に行われる。実際に箱塚



写真3. メガホンで今日の予定を呼びかける

桜仮設住宅に調査に行った際にも行われていたが、その時は有名人の来訪と言う事で、メガホンで情報を知り、多くの住民が集会所に集っていたのが印象的であった。特にメガホンに驚いている様子も無く、日常的に行われている呼びかけであるという事が出来るであろう。

④ 「見守り隊」によるよびかけ運動、非常ベルでのサポート

上記3つの活動を上手く組み合わせることにより、自治会活動に参加する住民は確実に多くなったという。しかしながら、それでも参加しない住民の傾向に「75歳以上の後期高齢者」や「病気を患い、寝たきりになりがちな高齢者」「トイレが近く、なかなか集会所での活動に参加出来ない住民」など様々な事情を抱えている。それらの傾向がみられる住民は自分から他の住民に情報を発する事が少なく、結果として1人になりがちであり、その為、阪神・淡路大震災では多くの孤独死・自死が見られた。

「見守り隊」は孤独死・自死を防ぐために結成された。元々の地区の民生委員を中心とした60代女性9人で構成されている。毎日、挨拶運動を行っていき、「おはいがす」「おばんです」など、あえて方言を使うことで安心感を得ようという試みだ。〇〇さんと名前を呼んでから挨拶することを心がけ、それと同時に顔色を見ることで、健康観察も兼ねている。最初は反応に応じてくれない住民が大半だったが、徐々にあいさつを返してくれて、そこから誘える方は集会所の活動に参加してもらうよう促している。

また、緊急時のお年寄りの方への防犯や健康面の対策として、防犯ベルを利用している。特に夜間の対策として、1人で暮らしているお年寄りの方に防犯ベルを持たせ、何かあったらベルを鳴らすことになっている。防犯ベルが鳴ったら、隣近所が駆けつけるという箱塚桜仮設住宅独自の体制をとっている。この体制は、自治会が直接住民に対し事情を説明し、防犯ベルが鳴ったら駆けつけるという仕組みを掲示板や回覧板で周知させる事を徹底した。その後、名取市が行政側の対策として80歳以上の方の家の前にブザーが鳴るシステムを設置した為、箱塚桜仮設住宅では独自の防犯ベルと合わせ、二重の防犯・健康対策が働いている。

掲示板、回覧板、メガホン、見守り隊、そして防犯ベルといった隅々までに情報や、手を加える事で嫌でも孤立させない仕組みを自治会、そして住民同士で作りに上げているシステムになっている。この為、意識していなくても集会所のイベントや会合が把握できる。また、災害仮設住宅では個人情報の保護という観念から、何処に誰が住んでいるのかわからない。または自治会長などの役員だけが理解しているという例が多くみられるが、当該地では、「自治会長の家」、「みまもり隊の家」というように独自で作成した表札を作ることで何処に誰が住んでいるのかわかりやすい仕組みを取っている。これらの効果があつてか、2012年1月現在、当該地は「孤独死・自死」はゼロである。

## 2-5-3 日常生活や、「イ・ショク・住」を支えるアプローチ

今までは集会所活動や広報活動といった特別な自治会の運動を追ってきたが、この項では仮設住宅での日常生活において、箱塚桜団地自治会の様々な取り組み、そして大脇会長が仮設住宅のこれからの問題として捉えた「イ・ショク・住」についてそれぞれ記述していく。

まず普段の日常生活における自治会の取り組みであるが、これは自治会の取り組みというより、それに感化され始まった運動が多く行っている。住民の「近くに郵便ポストが欲しい」というニーズを直ぐに行政に反映させ設置したり、消火器を設置したり、自転車置き場も30代の若い世代が「出来る事をしていきたい」と自主的に行ったりと、特段目立った動きではないが、自分達が出来る事やっていく空気が自然と出来上がっている。

またバスツアーの事例についても紹介していく。箱塚桜団地から名取市内の大型ショッピングモールまで距離があったため、自治会が要請し、買い物バスを週に1回運行した。9時から12時まで時間を決め、買い物に出かけている。3時間では時間が余ったことから、希望者を乗せてバスによる被災地を巡るバスツアーを行っている。

このバスツアーでは、同じように津波の被害を受けた宮城県内のほかの地区や、かつての貞観地震によって大津波が襲来した際の指標となっている浪分神社に行くことによって、自分達の地域、世代だけではないということを住民同士が共有し、気持ちを和らげていく狙い、また早期復興を果たした仙台空港を視察する事で、計画の大切さを訴えていたことが最大の特徴であると言える。

表2. バスツアーで訪れた地区・目的

【訪れた場所 7・8月】

7月	① 名取市閑上地区
	今まで住みなれていた地区を訪れ、現状を確認。その壮絶な被害、また閑上の歴史を築いていた故人を偲んだ。
	② 仙台市若林区藤塚・荒浜地区
8月	この地区も壊滅的な被害を受けている。どうしても自分達だけが被害を受けたと悲観的になってしまう意識を変えてもらう目的。
	③ 仙台市若林区霞の目・浪分神社
	かつてはここまで津波が浸水したという目印を見に行く事で、伝承する大切さを感じ取らせる目的。
	④ 名取市・岩沼市 仙台空港
被災し、空港としての機能を喪失していたが、計画が立ったため早期の復興を果たした。これをモデルに復興計画を進めていこうと感じさせる目的。	
⑤ 亘理町荒浜地区	
観光資源としてのホテルがそのままにされており、未だに復興の道筋が立っていない。復興計画の大切さを感じ取ってもらう目的。	



生活の重要な要素である「イ・ショック・住」に対する箱塚桜団地自治会の取り組みを取り上げていく。ここで敢えて「イ・ショック」に関しては、カタカナでの表記をしている。これは仮設住宅で生活を行っていくうちに、どんどん問題が変化していくからである。当該地では各地から寄せられた支援物資を上手く利用し、自治会として機能してきた。震災後、家を流され、避難所に避難し、仮設住宅での初期の生活の頃は、食べ物や服、何より住む場所の「衣食住」が必要とされてきた。その後、仮設住宅での生活に慣れ始め、徐々に震災前の日常生活に戻ろうとしてくる頃に、「衣食住」だけでなく、慣れない環境や元々発症していた病気、震災により仕事を無くしてしまった労働者、また仮設住宅では無く、移転の問題をどうしていけばいいのかという「医職住」が顕著な問題として現れた。行政もこの対策には乗り出しているが、箱塚桜団地自治会もこの問題に対応し始めた。

はじめに、「医」の対策として住民のために循環バスや定期的に医者が診療に来てくれる取り組みを始めた。この取り組みは、身体の診療だけでなく、心のケアをしていく時間も多く設けている。また、週2回の受診バスの他にも、週1回の健康診断として、看護師を目指す学生などが訪れたり「医」の充実を図っている。心身ともに健康になってもらうことを目指し試みていて、実際に参加する住民も多い。

「住」に関しては、震災の有無に左右されず、必要とされている。当該地では、仮設住宅内での住民全員の情報の共有は必要最低限として回覧板を回すことをはじめ、買い物の不便さを便利なものへと変える買い物バスなど様々な工夫を凝らしている。「住」に関して世代を超えて住みよく暮らせる仮設住宅への取り組みに力を入れている事がわかる。しかし、震災前とは明らかに「住」の捉え方が変化している。震災を乗り越え、8カ月経った今、「住」は将来の住む場所などの不安に変わってきているのだ。「住」への不安を軽減するために、いち早く安心できる復興計画を望んでいる。

「職」に関する対策は未だ足踏みの状態であり、市または県の援助も必要となっている。震災により、職を失った人は少なくない。今後「職」を充実したものへ変えることが課題となるようだ。

このように、当該地では「衣食住」の問題も残しつつ、徐々に「医職住」への問題にも対応し、変化していった。震災直後、家を失った方々にとって「衣食住」が目の前にある問題であった。着るものを探し、食べ物を探し、住まいをさがし、救援物資や避難所に頼る生活を送った。仮設住宅に移り、被災者の住民の問題は「医職住」へと変わり、仮設住宅運営の背景には「医職住」を助ける対策が施されている。

### 第3章 コミュニティにおける「地域性」

前章では、当該地の概要と行われている活動を大きく3つに分け紹介した。本章では、2章で提示した「地域性」の要件から分析していきたい。「地域性」とは同じ空間にいる認識であると説明してきた。当該地で行われている活動がどのようにして、理想的なコミュニティ形成の3要件の1つである「地域性」の認識を高めていったのかを明らかにしていく。

#### 3-1 桜団地という名称がもたらした所有意識

当該地は「箱塚桜団地」という地名で住民だけでなくメディアにも定着している。以下では、「桜」と「団地」それぞれについてみていく。

##### 3-1-1 日常的に使われる「桜」の名称

箱塚桜団地のその周りには桜並木がそびえたっている。仮設住宅の入居日2011年5月3日、その時にちょうど桜が満開であり、そこから箱塚「桜」団地と名取市長が命名したということだ。そのようにして箱塚一丁目に立てられた仮設住宅は市から「箱塚桜団地」と名付けられた。この「桜」という名称は当該地の活動などにも使われており、① <sup>おうびかい</sup>桜美会、② 日常生活に置いての桜の名称の利用に分け紹介していく。

まず① <sup>おうびかい</sup>「桜美会」という活動についてである。この会は60歳以上を中心に約40人で結成された。名前の由来は、入居時の桜が綺麗だったことから「桜美会」と命名し、その桜を忘れないようにしようとする目的がある。桜美会の活動の中で中心的な活動、それは環境美化活動である。環境美化活動は、定期的な活動として朝の除草作業を行っていたりと、綺麗な仮設住宅は桜美会を中心に維持されている。

次に、② 日常生活に置いての桜の名称の利用についてみていく。まず、自治会は箱塚桜団地自治会と名乗っており、殆どの自治会の所有物には「桜団地」と書かれている。また仮設住宅内の通路も「桜大通り」「桜西通り」と桜の名称が付いており、こちらも子供の「ちびっこひろば」等の活動もあつてか、定着している名称である。あらゆる活動、あらゆる機会に「桜」の名称を使う事が多い。

「桜美会」、「桜大通り」「桜西通り」などの当たり前に「桜」を掲げ、使用している事が、「桜団地」という他の仮設住宅にはない愛着をもたせ同じ空間にいるという認識を高めた。

##### 3-1-2 地域性を高めた「団地」の存在

従来の仮設住宅は、名称やメディアから「〇〇応急仮設住宅」や「〇〇仮設住宅」と呼ば

れる事が多く、その後の自治会形成においても「〇〇仮設住宅自治会」と呼ばれる事が多い。しかしながら当該地は「箱塚桜団地」という地名に拘らない名前であり、またそれが住民だけでなくメディアにも定着している。同市の仮設住宅と比較して当該地が特異な点は団地の定着にある。

当該地は名称やメディアからも「箱塚桜団地」と呼ばれ、5月8日に発足した自治会も「箱塚桜団地自治会」と名乗っている。通常、団地とつくコミュニティは地域の住宅街を示す事が多い。「〇〇団地一丁目自治会」といった感じである。そして自治会は半永久的に続く組織であるという認識も存在する。

コミュニティの活動に積極的に参加する条件として、様々な要因があげられるが、ここでは箱塚桜団地という名称の定着がもたらした愛着といったものを取り上げていきたい。愛着を感じれば感じるほど、人はそのモノの変化に気づき、世話をする。逆に愛着を感じないコミュニティや組織に、人は積極的な活動を見せない。

当該地では箱塚桜団地と皆が呼ぶだけではなく、仮設住宅内の道路を「桜大通り」、「桜西通り」という名称を付けている。震災前の道路は一般道という認識で、頻繁に清掃活動を行うことがなかったが、現在は「桜美会」の活動で頻繁に美化活動を行っている。また2011年9月に発生した台風15号の被害を受け、駐車場の砂利が、仮設住宅内の道路に流れ込んでしまうという被害が発生した。

今までなら市役所に電話していたと話す自治会長であったが、電話をすることもなく団地内の若い世代が仕事に出かける前に清掃を行った。これは震災前では見られなかったことであり、「桜美会」が普段から清掃活動を行い、また子供が「ちびっこひろば」として遊び場としても当たり前のように接することになった事が大きいと考えられる。

本来仮設住宅も市が管理するものであり、清掃活動や自治活動も積極的に行われていない仮設住宅では、市の業務にまかせっきりになる事も少なくない。しかし、箱塚桜団地は、住民が日常的に清掃活動なども自分達から行っている。住民1人1人が「自分達に出来る事をする」という姿勢が、震災を機に定着したからと言えるだろう。また「桜」を様々な場所で意識させられることにより、自然と「桜団地」という名称が一般化し始めてきた。自分達で自治しているという意識、そして何より「桜団地」という愛称が定着してきた事が、自然と仮設住宅の所有意識が住民に有ると捉え始め、まるで昔から自治されてきたかのようなコミュニティ形成の一因になっていると言える。

また震災以前と違い、全ての世代が交流可能で、集会所を自由に使える場となった。このことが、住民のなかに愛着をもたせ、ここでいう里親のように団地全体を考える、つまり同じ空間にいると言う認識を高めた要因の一つであると考えられる。

### 3-2 地域性を高める「世代間交流」

当該地では様々な取り組みの効果か、現在は日常的に高齢者と子どもの交流を代表するように、世代間交流が当たり前のものとなっている。このことも、同じ空間にいるという認識を高めた要因であると考えている。ここから文献を挙げ、検証していく。

鳥越皓文は、高齢者等の地域に根付く住民がコミュニティで生きていく為の知恵の伝授を目指しており、それこそが自分達のコミュニティを将来的に上手く回転させることに繋がっていた。また、コミュニティにはその知恵の伝授をしてきた長い歴史があり、このことを「平凡教育」(鳥越, 2009)と提唱した。コミュニティが家庭の子育ての足りない点を補い、それ以上の効果も子供たちに与えてきた。ここでは地域の高齢者は「社会的親」と呼んでいる。社会的親は、家庭内では指摘できない点を注意したり、教えたりしてきたのである。メンバーの幾人が社会的親の役割を担う必要がコミュニティの必要性でもあると指摘している。

当該地の事例に例えるとこのような集会所活動やベンチ、「ちびっこひろば」を通して、お年寄りが社会的親となって、平凡教育が成り立っているというちびっことお年寄りの交流が活発に行われているその交流を契機として、理想的なコミュニティは形成された。しかし、当該地はお年寄りと子供たちの交流に留まらない全世代の交流が特異とされていて、理想的なコミュニティ形成を成功させた大きな要因である。どのようにして、お年寄りとお年寄りの交流が中間の若い父母世代を巻き込んでコミュニティ形成に至ったのだろうか。全世代の交流が盛んな当該地を、理想的なコミュニティとすることから、この部分について説明しなくてはならない。

まず若い父母世代を巻き込んだのには二つの要因があると考えられる。ひとつは ① 目的の達成、ふたつめは ② 母親に対する手助けである。

まず、①の目的の達成としては、自治会長が「お年寄りとお年寄りを対象に笑顔になれるような行事を企画。お年寄りや子供達の笑顔がお母さんお父さんの世代に勇気と希望を与えること」と述べており、自治会の目標とされていた。この目的をもとに始まった集会所活動であるが、集会所内での活動のみならずちびっこひろばで交流が活発になり、外から中まで笑顔の溢れる仮設住宅となった。子供が積極的に参加していくなら、親も引っ張られて参加せざるを得ない。

そして、②母親に対する手助けは、幼い子供を持つ母親は、常に子供の子育てに時間にとられがちであり、ゆっくりとリラックスする間も無い。また「てんしのわ」をはじめとする団体などのおかげでこどもの世話を任せることができるようになり休息ができた。また、お年寄りは子供の動きを見てさっばめる(口出しする)という。震災以前は、お年寄りとお年寄りの交流することも少なかったことから、仮設住宅内でのそのようなさっばめるという行為はお母

さんたちを助け、安心させている。子供の子育て補助という名目で、自治会活動に参加していき、その後もお祭りの席や、清掃活動の際にも、以前よりも積極的な参加が見受けられるという。これは子育てと言う日常的な部分での取り組みが上手くいったため、その他のイベントにも積極的な参加を促していると捉える事が出来る。

自治会でも、お父さんお母さん世代のコミュニティの積極的な参加は難しいと話していたが、現在では全ての世代が積極的に参加している。それは、チャイルドパークやちびっこ広場を通して面倒を見てくれるお年寄りが、「社会的な親」の役割を担っているからである。その行為が子育ての手助けをすることから逆の発想の認識につながった。「コミュニティが私たちに何かを与える（役に立つ）」。この何かとは、子育ての手伝いが核を占めており、最大の魅力である。そのことから、全世帯を巻き込んだ交流を可能とし、同じ空間にいる住民であるという認識を高めた。

### 3-3 地域性を高めた要因

まとめとして、コミュニティの要件である「地域性」とは、同じ空間にいるという認識を持つことによって高まるものである。地域性は、生活時間、生活空間が個々人ごとに機能分化する現代において、同じ空間であると認識することは容易ではない。当該地の住民である、上町地区も例外ではない。しかし、震災を通して変化したことは「地域性」の認識をもったことである。その要因として、「箱塚桜団地」という名称と、活発な世代間交流が同じ空間を挙げた。

2年間限定の付き合いになるかもしれないものであったら、人間関係の構築は薄くなり、以前と同じような生活を続けるであろう。それにも関わらず、「箱塚桜団地」は、既に完成された1つの団地に存在するコミュニティとしての様相を見せ、団地として成り立っている。その団地内には、ティールームやチャイルドパーク、ちびっこひろば、みまもり隊といった活動は様々な世代を巻き込んだものが存在し、一部の世代にとどまらず、全体が積極的に参加しているからである。そして自分達の仮設住宅を指す際に、「桜団地」と呼ぶ事が非常に多い。

当該地は箱塚桜団地そして、箱塚桜大通りや西通りといった呼び名が、住民へ愛着を持たせている。桜の由来は先述したとおり、住民の心理面への訴えかけが非常に大きいと考える。名付けた人物は市長であるが、その時の桜の美しさに殆どの人が涙し共感しているため、呼び名に愛着をもっている住民が多いのも一つの理由である。桜美会という組織が存在する事もそれを証明している。愛着を持った事により、自分達の団地に興味関心を抱く。それに加え、団地内の活動も人々に影響を与えその愛称を自分達で使い続けることになった一要因で

ある。

仮設住宅団地という与えられた受動的な地域の枠組みから、桜団地という自分達でコミュニティを作っていくという積極的な内実へ変化した事が、箱塚桜団地という「地域性」を認識させ、コミュニティ構築のひとつの要件を創り出しているのである。

#### 第4章 コミュニティにおける「共同性」

前章では、コミュニティの条件である「地域性」を当該地と照らし合わせみてきた。本章では、コミュニティの2つ目の条件である「共同性」をみていく。「共同性」とは、同じ利害や目的があることを意味する（宇都宮，2006）。当該地において「共同性」と表すものを提示し、検証する。

##### 4-1 「元気な」コミュニティへのシフトがもたらした共同性

果たして、自治会は当初から仮設住宅の成功を目指して運営を行ってきたのだろうか。初め大脇会長は「孤独死・自死ゼロ」を大きな目標として掲げていた。現在もその目標に変わりはなく、運動は継続されている。しかし「チャイルドパークティールーム」や「ちびっこひろば・ベンチ」、「動物園・あいさつ運動」などは子供を巻き込んだ活動であり、最初の目標からはやや異なったものになっている。

本項では最初の目標であった「孤独死・自死ゼロ」から、いつしか「元気なコミュニティ作り」にシフトしていったのではないかと仮説を立て、検証する。またそれが、なぜ共同性を高めるにいたったのかを分析していく。

自治会活動に積極的に参加しない人も当初は多く見られていたし、仮設住宅という時間の制約がある以上、当初はコミュニティ作りを目指していたものでは無く、「孤独死・自死を出さない」という目標を立て自治会活動を展開していった。上記の目標を達成する為に、「引き籠もらせない」という対策を打ち出し、集会所を積極的に推し進めていった。本来「ティールーム」や「ベンチ」も高齢者同士でお茶を飲む機会・散歩に何気ない会話を出来る席として用意したものであったが、「チャイルドパーク」、そして「ちびっこひろば」が隣接していた事が、偶然子供と高齢者の交流を生み、日常的なものへシフトしていった。そこから自治会長の大脇さんが打ち出す自治会活動も世代間での交流を活かした夏祭りのイベントや、あいさつ運動など「コミュニティ作り」へと変化していった。これは元々大脇さん自身も予期しておらず、意図せざる結果によって出来た活動であると述べている。大脇さんの意図が変化したのもあるのだが、自治会活動に参加する人びとの意識が変化していることも要因の一

つと考えられる。それは何故なのだろうか。以降で、「理想的なコミュニティ」へのシフトが共同性を高めたのか分析していく。

#### 4-2 理想的なコミュニティがもたらしたもの

前項では、「孤独死・自死ゼロ」を目指していた自治会の活動が、「元気な」コミュニティへ変わったことを示した。本項では、当該地を理想的なコミュニティと位置付けその理由の検証と、理想的なコミュニティによってもたらされたものを提示する。

##### 4-2-1 理想的なコミュニティとは

被災地県内の仮設住宅ではアルコール中毒者の急増・孤独死の出現・一週間も自死したのに気付かれなかった例が増えている等、深刻な社会問題として捉えられ始めたのに対し、箱塚桜団地は震災以前よりむしろ健康で文化的な生活を送る高齢者が増えている。さらに、世代間交流が特徴であり、コミュニティの構築に成功していると言える。このようなコミュニティを筆者たちは「理想的なコミュニティ」と呼んできた。そして、今まで文献として取りあげてきた「サザエさん」的コミュニティの法則では、活発なコミュニティを「元気なコミュニティ」と呼んでいる。そこで、鳥越のいう「元気なコミュニティ」の必要要素と当該地の活動と照らし合わせてみる。また、そこからみえてくる当該地のコミュニティが理想的であると意味づける理由を探っていく。

「元気なコミュニティ」の要因は ① 親戚のような他人がいる、② ちょっとした親切（奉仕活動）がある、③ 子どもとお年寄りの世代間交流がある、④ 独自の文化がある、⑤ 全員が楽しめる・参加できる活動があると鳥越は述べている。ここからは実際に当てはまる要因にどのような活動が行われているか見ていく。

① の親戚のような他人がいるとは、お年寄りが子どもたちに「さっぱめる」（口出しすること）で、住民全体で子供たちの面倒をみる行為がある。他人であれば無関心であり、子どもが何をしようと思わない。しかし、当該地ではお年寄りが常に子どもに目を配り、注意をしたり時には叱ったりもする。震災後は住民全体で面倒をみることにかわり、関心を持つようになった。

② のちょっとした親切（奉仕活動）とは、桜美会の活動を示している。桜美会は美化活動を通じてごみの落ちていない仮設住宅を目指している。また、朝の除草作業を定期的に行うなど、これらの活動は奉仕作業といえる桜美会は、お年寄りの方々に結成されている会である。仮設住宅内をきれいにするという活動には、メンバーの子供たちへの思いがある。

若い父母世代にも、奉仕活動がみられる。2011年9月に発生した台風の翌日には、早朝

から皆が通れるように復旧作業に取りかかった。これは、誰かに指示されることもなく積極的に取り組んだ活動である。

③の子供とお年寄りの世代間交流があるとは、仮設住宅内の集会所を中心として様々な場所に子供とお年寄りの交流が見られる。さらに、当該地の特異な点はこの世代間交流が、子供とお年寄りの間の世代を巻き込んだ事である。このことから、必要条件を十分に満たし、若い父母世代も交流があるというプラス $\alpha$ が存在するのである。

④の独自の文化があるとは、今まで築き上げてきた閑上地区の文化が津波によって流出してしまった。これは、もちろん有形のものばかりではなく、亡くなったたくさんの方々も含む文化である。しかし、当該地には文化を維持させていく試みがあり、それに留まらず、文化を新たに作っていく試みがみられる。

まず、文化を維持させる活動として「閑上太鼓」が挙げられる。閑上太鼓は、震災以前から閑上地区の人々が文化として受け継いできたものであった。上町地区の一部の人々も参加していたという。夏祭りでは、閑上太鼓を中学生から70歳代までの幅広い世代の住民が集まって披露した。しかし、津波によって流失してしまった道具も多い。その1つとして、万祝(まいわい)が挙げられる。「万祝の贈呈式をもって、復興閑上太鼓とする」と言われているように、重要な文化として捉えている。次に、新たな文化形成として「桜美会」を例にとって考える。当該地の入居者が暮らしていた上町地区は、戦後からの「男女7歳にして席を同じくしてはダメだ」という教訓を守り続け、震災前には男女別々の会が機能し守られていた。しかし、仮設住宅に入居して、その教訓を打開して男女混合の会を作った。それが「桜美会」である。以前の守り続けてきた文化を、仮設住宅では変えていこうとした。このことから、以前の暮らしと仮設住宅の暮らしを差別化して考え、新たな文化を形成しようとする姿勢がみられる。

⑤の全員が楽しめる・参加できる活動が有るとは、自治会を中心に活動が行われているが、大脇さんは「だんだん全ての世代の目線で物事がみえるようになった」と話す。このことから、行われる活動は全員で参加して楽しめるものを前提にして考えられている。実行された夏祭りは、大成功をおさめ良い思い出として住民の心に残っている。さらに、集会所活動では住民全員を対象に行事が計画されている。

また、現在計画しているもので「桜団地居酒屋」がある。非常に「全員が楽しめる・参加できること」を意識した活動である。班ごとに当番制にして、自由に料理を持ち寄って本日のメニューにするという予定である。この居酒屋には、自治会のもっと住民のコミュニケーションを図っていきたいという思いがあり、強まった世代間交流をさらに強いものにさせる装置として取り入れていくのである。



以上が、鳥越の述べる元気なコミュニティの必要要素を満たしていることがわかる。しかしながら元気なコミュニティと当該地のコミュニティの特異な部分は、前者は過去の人が積み重ねた人間関係などの蓄積であることに對し、後者は入居後わずか8カ月で構築され機能していることである。短期間で人々が協力して作り上げたものであるということから、「理想的なコミュニティ」と呼ぶことを提示しておきたい。

#### 4-2-2 理想的なコミュニティがもたらしたもの

当該地では、震災前よりも住民の意識に大きな変化がある。大脇さんも、住民全体で「気づきが持てるようになった」と話す。ここで、当該地では日常の中で気づきを持ち積極的に動く事例を挙げる。

1つめの夏祭りの事例を挙げていく。2011年8月19日に開催された夏まつりは、自治会メンバーからは実施が困難ということや、震災から5カ月しかたっていないこともありまだ早いのではないかという声が上がった。しかし、楽しむ目的のほか、先祖と津波で亡くなった方の供養と慰霊・鎮魂をかねた閑上復興の礎にしようと開催が決まった。開催にあたり、住民内で閑上の伝統文化でもある「閑上太鼓」をするグループ、レグダンスを披露するグループなどが練習をして本番ではまつりを盛り上げた。また、こども神輿はダンボールでこどもたちが作ったものである。

祭りの参加者は住民を含めて約280人を予定していたが、当日は約500名を超える参加者が集まった。まつりには、屋台などのボランティア団体も加わり賑わいを見せ、フィナーレは線香花火で締めくくった。住民が一体となり、夏まつりを成功させようと積極的に協力し、アイデアを出して努力をした結果、大成功をおさめたのである。

そして2つめの事例は火災防火訓練である。当該地では、消防車を搬入し、10月8日に仮設住宅初の火災避難訓練が行い、仮設住宅にいた方々全員が参加し、結成した消防協力隊を中心に避難訓練をした。「自治会」、「みまもり隊」、「班長」が叫び火事を知らせ、消防協力隊が誘導や消火作業にあたった。

最後の事例であるが台風での避難が挙げられる。入居後約5カ月後の9月下旬に発生した台風15号で箱塚桜仮設住宅も水害に見舞われる恐れがでたため、午後8時半、仮設住宅全員で近くの小学校へ避難を決め、全員が文句も言わず従った。同日、午後11時半に避難解除を申し渡した。翌朝を迎えたが、仮設住宅の通路は台風で流れた砂利でいっぱいになった。市役所に電話して復旧してもらおうという意見も出たが、若い父住民たちは早朝に積極的に片づけを行い、通学・通勤時間内には作業が終了し、住民が歩けるようになっていた。

この他にも、当該地には震災前そして仮設住宅入居当初は、自ら動こうとしなかったが自

分たちのできる事は自ら進んでしようと生活の変化が顕著にみられた(表4)。それは、自治会などに多くみられるお年寄りの方々だけではなく、子供や大人全ての年齢層において言えることである。

このように人々の生活に変化がもたらされたのだが、災害を契機にコミュニティには、地域生活の変化がもたらされるということが過去の震災でも実証されている。ここで、過去の大地震の2007年中越沖地震の例をあげてみる。中越地震を詳細に分析した社会学者の松井克浩は、「地域のつながりという面では、地震をきっかけとして強まったと受け止めている人が一定存在している」(松井, 2011: 135)。それは、①個人の生活面では生活面での協力、地域の人とのあいさつ、地域への関心や愛着が増えた②地域のまとまりやあいさつ、会話行事が増えたと感じている人が①、②ともに全体の二割弱で「減った、悪くなった」と回答する人より回答が多かった。当該地に住む住民も地域のつながりという面で、地震をきっかけとして強まったと受け止めている人が多数いる。当該地での理想的なコミュニティは、生活がよりよくなることを考え積極的に動く人々を創出し、生活の向上をもたらした。

#### 4-3 イレギュラーな事態がもたらした住民主体性

当該地の人々が住んでいた名取市閑上上町地区は、震災以前活発にコミュニティ形成に取り組んでいた地域ではないのにも関わらず、入居後わずか8カ月しか経過していないのに理想的なコミュニティが形作られた。それは当初から意図したものではなく、目標としていなかったイレギュラーな事態である。

全ての世代を巻き込んだ理想的なコミュニティの中には、住民の主体性がみられるようになったといえる。

今まで感じなかった町内会(コミュニティ)が当該地である箱塚桜団地で大変重要であると住民が判断し、必要性を認識して自ら主体となって活動した。閑上上町地区の人々が2年という制約された時間の中でコミュニティを意識し、何故コミュニティを意識し、活動を行うようになったのか。その要因を次項に分析したい。

#### 4-4 閑上上町地区の災害に対する「適応策」

閑上上町地区の人々がコミュニティを意識し、活動するようになった要因は何であったのだろうか。この項では、国や自治体、世帯単位ではなくコミュニティを主体とした回復条件が問われるのかを説明していく。

社会学や文化人類学において震災などの自然災害が扱われるとき、注視されるのは被災した当該社会(ないしは最小単位としてのコミュニティ)にとってどのような経験であったと

いうことであった。というのも、災害は単に人びとが災害因となるインパクトを均質に経験するのではなく、それまでコミュニティに蓄積されてきた「適応策」を緩衝材として経験されてきたからであろう。言い換えれば、社会学者や文化人類学者が災害を知るうえでとりわけコミュニティに注目してきたのは、われわれの社会が本来、ある程度の災いに適応または対処可能な余地を備えていたからであり、それが許容不可能となったときに起こるのが災害であるという社会学的な災害観を共有しているからといえるだろう（植田，2009）。

以上から、コミュニティには災害に備えた「適応策」が緩衝材、つまり、災害と人々の間に立って衝撃を緩め、和らげるものを有しており、それ故に人々はコミュニティに着目するということがわかった。では、上町地区の人々が有していた適応策とは何であったのだろうか。

上町地区は閑上地区のなかでは海から離れた場所に位置しており、住民たちは地震が来るたびに津波がくるという危機意識は持っていなかった。上町地区を襲った津波というと今から約1,000年以上前に閑上地区全体を襲った「貞観の津波」があり、その時にここまで波が来たと建てられた「浪分神社」は、「貞観の津波」が到来した位置を示すことを目的に建てられた神社であり現在でも残っている。これは、津波の危機を知らせるために作られた「適応策」であったといえる。しかし、これは閑上地区全体という閑上地区内にある各地域が共有する「適応策」であり、上町地区の「適応策」は、存在していなかった。故に、コミュニティの中の「適応策」を意識することがなく、コミュニティの強固なまとまりを持ち合わせていない。

コミュニティには、災害に対する「適応策」を持ち合わせていて、それが許容不可能となったときに起こるのが災害であるという社会学的な災害観を共有していると述べた。また、「コミュニティという小社会を注視してみれば、災害は、人々が危険というものをどう組み立てているか（中略）自分たちの環境と生業をどう見ているのか、どう説明し教訓を作り自分たちの存続を企て将来を見込んでいるか、といったことを明らかにする契機」（植田，2009）と述べる。

実際に、当該地では、「買い物バスツアー」の中で、浪分神社に行ったが、「こんなものがあつたなんて知らなかった。もっと早く知っていたら…」（住民A）と話す。

震災以前は、その「適応策」が、閑上地区全体という幅広いフィールドで共有し、かつ認知度が低かったことから住民にとって馴染みがなかった。しかし、現在入居する仮設住宅は、閑上地区全体と切り離されたフィールドで上町地区というコミュニティが浮き彫りになり形成された。

震災を経験した人々にとって、上町の中でコミュニティの適応策を考える契機となり、適

応策の必要性を個々で認識した。また、「適応策」の必要性に気付き、考えることは、今まで干渉することもなかったコミュニティを意識するようになったといえる。このことから干渉されることを受け入れた一要因であるといえる。

本章では、当該地の「共同性」を、理想的なコミュニティ形成と、災害によって生まれた「適応策」として分析し、当該地での目的や利害を示した。2章で挙げたように住民たちは積極的に夏祭りや桜美会の活動に参加している。しかし、元々大協会長は自治会活動にあまり積極的ではなかったと発言している。また、住民たちも同様に当初は積極的ではなかった。理想的なコミュニティを築くにいたった当該地の住民たちは、まさに変化したのだと捉えることができる。

#### 4-5 「共同性」を高めた要因

以上このことをまとめると、コミュニティの要件である「共同性」とは、同じ利害や目的がコミュニティ内にあるという認識を持つことによって高まるものであるといえる。本章では、当該地の「共同性」を、理想的なコミュニティ形成と、災害によって生まれた「適応策」として分析し、当該地での目的と利害を示した。住民たちは積極的に夏祭りや桜美会の活動に参加している。

「適応策」は、同じ利害があるものとして位置付けた。前項の通り、もともと上町地区の住民は災害に対する適応策の必要性をほとんど認識していなかった。認識するきっかけとなった出来事が今回の大震災である。上町地区では津波によって住宅の全壊や身近な人の死など、住民それぞれが経験している。この経験を住民同士が共有する役割を担ったものとして買い物バスツアーがある。津波の被害を受けた宮城県内のほかの地区や、かつての貞観地震によって大津波が襲来した際の指標となっている浪分神社に行くことによって、住民同士が別々に持っていた災害の経験を共有することにつながった。それは、上町のある関上地区に買い物バスツアーを利用して戻った時に、参加した数十人全員で、大声で泣いたという出来事から、住民同士の共有物と捉えることができる。

当該地のコミュニティ作りや、適応策の必要性を認識したことによって、当該地の「共同性」は高まったと考える。

### 第5章 コミュニティにおける「地域社会感情」

本章では始めに、なぜ箱塚桜の住民がコミュニティを生活の基盤として積極的に受け入れられるようになったのかを見ていく。その上で、地域社会感情がなぜ高まっていったのかそ

の要因を分析していく。

### 5-1 干渉されない生活から干渉を「受け入れる」生活への変化

コミュニティ作りに積極的では無い地域は、現在の地域社会ではありふれているが、言い換えれば、「価値の多様化を認め互いに干渉されることの少ない生活に馴染んだ人々のコミュニティ」(野田, 1999: 297)である。このようなコミュニティは、日本に多く存在する。ここで、顔馴染み同士の挨拶を交わし、交流なども特にしていなかった当該地の人々も、干渉されることの少ないコミュニティと位置付けることとする。そのような、生活を送っていた人々にとって、仮設住宅入居後も変わらず生活するのであれば不干渉であり、活動に参加しない世帯も増えるはずである。例を挙げれば、世代間交流の重要性に気づく契機となった場にも参加せず生活を送り、干渉されない生活を送っていたであろうということだ。

社会学者の松井克浩は、「地域のつながりは、人びとを支え、助けるものであると同時に、縛り、拒むものでもありうる」(松井, 2011: 137)と述べている。これについて当該地の例でみていけば、前者の人びとが支え助けていくものというプラスのとらえ方が行事などで生まれ、コミュニティ形成に活発に取り組んでいる。しかし、干渉されないコミュニティに属していた人びとにとって、後者の縛りや拒むものといったマイナスのとらえ方もある。

地域のつながりがもたらす「縛り、拒むものでありうること」に関して例を挙げれば、自治会は「孤独死・自死を出さない」ということが箱塚桜団地の縛り・拒みである。言い換えると、「孤独死・自死」が起きてしまう、また起こしてしまうことは自治会の倫理には外れるが、個人の倫理・考え方を否定する事にはならない。また自治会の活動に積極的に参加してもらっても、参加しない事を拒み・否定している事になる。しかし、箱塚桜団地では震災以前と一変して干渉しあうコミュニティになっていった。不干渉な生活を送っていた人びとにとって大きな変化である。それを縛りや拒みではなく、人びとの助け合い・支え合いを受け入れたものは何であったのだろうか。

災害を通して人々が干渉を受け入れる、つまりコミュニティを意識するようになった要因を考えていく。

### 5-2 人々を取り巻く災害の〈死〉の存在

今回経験した震災では、津波によって入居する方々の家は全壊で、関上地区全体で約700名の方の死、上町町内でも多くの方の〈死〉があることを頭に入れておかねばならない。

「車が渋滞している車線を飛び出して、反対車線を走ったから助かったけど…並んでいた人たちは流されてしまった。」「避難した小学校にも津波がきて、急いで逃げると引っ張られ

た腕がまだ痛む。もう何カ月も前のことなのに…」「泥だらけの足に皆で買い物袋をつけて汚れないようにしながら避難所にバスで向かった。苦しかった。」普段は集会所で笑い声をあげ、明るくお茶を飲む住民に見えるが、実際に被災した経験をこのような言葉を話してくれた。

また、震災後に閑上地区に数十人で戻った時には「〇〇さん死んでしまった」「おらいの家はもうねえんだ」とそこにいた全員が大きな声で、泣いたという。世代間交流を活発に行い笑顔あふれる当該地では、このような悲痛な思いも抱えている。津波から逃れて命からがら助かった方、津波でまちが飲み込まれていく姿を目の当たりにした方、家族を亡くしてしまわれた方もいる。震災を通して人々の中には隠されながらも、確実に<死>の問題が存在している。

上町地区の震災以前の生活を見てみると、お年寄りだけの世帯、または、核家族が多かった。しかし、震災で死というものが身近になかった住民の中に、震災で自分たちの住んでいた場所で亡くなった方がいることなどを通して、共通の<死>を持つことになった。それは、震災以前は、なかったものであり、受け継ぐことが難しい死を住民たちは共通意識として持つようになった。

この「死」、そして「生」という共通意識は、コミュニティの定義である③地域社会感情に該当するものであると考えられる。「地域社会感情」とは、共通する利害や目的を通して、「おらが村」という「われわれ意識」を強く醸し出してきているという要件である。

当該地で行われている行事の目的として「この団地の中には、家族を亡くした人、近所の親しい方を失くした人、友達を失くした人がたくさんいる。そのような人たちが前に進むのは、笑顔しかない。亡くなった人のためにも笑顔でいなければいけない。」と大協会長は話す。死を忘れてはいけないという目的は、住民にも伝わり日々生活をしている。

「孤独死・自死ゼロ」を目指し、引き籠もりを無くす自治会の当初の目標は、集会所やベンチ・大通りでの子供とお年寄りが共に楽しめる様々なイベントを可能とした。世代間交流が活発になったことは、同じ意識を共有させることも可能とした。昼間は集会所でお茶会という楽しそうな一面にしか聞こえてこないが、実際は震災でなくなったものに対し、皆で話し、皆で泣いて悲しんでいるという。「死」の問題を1人で抱え込むのではなく、共有することで和らげている。

阪神大震災の事例をまとめたもので、防災の専門家である林春男は、被災地の本当の苦しみは、災害ユートピアの後にやってくると指摘している(林, 2009)。災害ユートピアとは、災害発生後100時間後(4日)から1,000時間後(40日後)にかけて見られる状況である。社会機能が復旧するまでの間、人々が応急処置的な対応でしのいでいる時期に被災地に善意

が満ち、助け合いの精神が顕著になる、そして住民があるものを分けあい、一種の原始共産的な暮らしがうまれることである（林, 2009）。当該地では、40日を超えてもなお、災害ユートピアのような状態であると言える。それは、被災地での苦しみを、コミュニティ内で共有し合っているからこそ可能にしていることである。

### 5-3 地域社会感情を高めた要因

コミュニティの要件である地域社会感情とは、共通する利害や目的を通して、“おらが村”という「われわれ意識」を強く醸し出してきているという要件であり、「われわれ意識」をもつことが地域社会感情を高めるものである。

本章では地域社会感情を高めたものとして、「死」を捉えてきた。箱塚桜団地はメディアでは仮設住宅の明るい部分が全面に報じられているが、確実に亡くなった家族・友人が存在し、「死」を意識して生活しているのだ。それを抱え込ませるだけでは無く、集会所で語り合うことや、バスツアーで閑上地区に赴き、悲しみを全面に出させるしかけが当該地には存在する。それは自分だけでなく、周りの住民と共有させており、当該地の特異な点であり、共通する利害や目的を表に出させる効果がある。1人で抱え込み、それが自宅に籠らせ、孤独死や自死、またアルコール中毒の人びとを出してしまう事例もあるのに対し、当該地は「死」という問題を敢えて明らかにし、全員で共有し生活することで、孤独死・自死、アルコール中毒者を出さずに、「箱塚桜団地」という理想的に見えるコミュニティを構成している。「死」という共有物を受け入れることが、地域社会感情を高めることに寄与しているのである。

### 結語 「まちの再出発」というコミュニティの捉え方

本論文では、当該地が理想的なコミュニティと呼ばれる要因を従来のコミュニティを形成する3つの要因で考えてきた。今までの章で宇都宮が定義したコミュニティの要件である地域性、共同性、地域社会感情の3つの点からそれぞれ箱塚桜団地を分析し、検証してきた。

当該地は世代間交流や「桜団地」という愛称からの所有の問題が、住民が同じ空間にいるという地域性を高めていた。また「孤独死・自死」を出さないという同じ利害・目的は共同性を高めることの要因となっている。そして、亡くなった人・物に対する悲しみ「死」の問題が、日常的な集会所でのティールームや、ベンチでの会話。またお祭りやバスツアーなどで分かち合い、共有する利害・意識となり、地域社会感情を高めてきたのであると定義にあてはめ、説明することが出来た。

これにより、当該地はコミュニティとしての要件を複合的に高めており、モデルケースと

なったコミュニティであると説明が出来る。筆者たちは今まで当該地を理想的なコミュニティと呼び、検証してきた。それは自治会の活動が地域性、共同性、地域社会感情を意図せず、高め、コミュニティの3つの要件を高めてきたからである。それはメディアから見れば、元からコミュニティがあったかのような地域に見え、コミュニティを作りあげた仮設住宅形成のモデルケースと呼ぶことが出来る。しかしながら、コミュニティが出来たのは共同性で掲げた「適応策」や、地域社会感情で取り上げた「死」の問題を克服するために必要であったためであり、コミュニティを構築したのではない。

元々上町町内会の時代から形骸化していたとはいえ、既存の自治会があり、活動はしていた。「死」の共有物があったから、地域社会感情が高まったと分析してきたが、上町町内会には無かったわけではなく、少なからず地域社会感情、「おらが村」という意識があったからこそ、亡くなった人々を悲しみ、弔っているということもできる。今回の震災を通して、上町町内会は今まで希薄であったコミュニティの必要性、生活の基盤と置いて生活する理由を体感した。箱塚桜団地は理想的なコミュニティを目指して活動しているわけではなく、必要に迫られ、それを住民自身が主体的に参加し、構築されたものが出来上がった。それを基盤として生活していると3つの要件の分析から論じることが出来る。

これにより、当該地はコミュニティとしての要件を複合的に高めており、モデルケースとなったコミュニティであると説明は出来る。この3つの要素が高まっていると証明できただけでも、箱塚桜団地はコミュニティとしての要件を高めたと呼ぶことが十分できる。しかしながら、なぜ当該地はメディアからも注目される、言い換えてしまえば、個人よりコミュニティを優先する、一種過剰ともいえるコミュニティはなぜ住民に必要だったのか。

筆者たちは、今までのコミュニティの捉え方とは違った新たな捉え方を提示したい。それは、「まちの再出発」のエンジンとしてのコミュニティである。

死を弔う意識の共有は、仮設住宅にとって「死」への償いの意識を和らげ、悲しみを緩和する目的であると述べてきた。しかしながら、災害によってもたらされたものは「死」だけでない。災害から難を逃れた住民が生きていくということも、もたらした。それは大協会長や住民が声を揃えてあげていることでもあり、という「生」の問題である。

当該地では、集会所やイベントの際に笑って楽しんでいる住民がほとんどである。「死」の問題を抱えている住民には見えないぐらいである。大協会長や住民は「泣きたいときは泣いた方がいい」と話し、ティールームでの会話やバスツアーで閑上地区を訪れた際に全員が涙を流しているという。一方で集会所でのイベントやお祭りでは笑いが絶えない。常に子供やお年寄りが交流できるスペースもあり、そこでの挨拶や会話も笑顔が溢れている。大協さんは「亡くなった人の為にも、笑って生きていく」とも述べている。



未曾有の大災害ともいわれる、今回の震災では他の仮設住宅をみても「死」を抱えている方は少なくない。しかし、当該地には震災に対して、悲しむ「死」の気持ちと、笑っていき「生」の気持ちの両方の捉え方が存在している。これは、箱塚桜団地特有の活動が影響していると考えられる。集会所でのティールーム活動等は日常的に、震災での悲しみを住民同士に共有させている。また被災地を巡るバスツアーでは、閑上地区を見ることで皆で、悲しみを共有し泣いた後に、仙台空港のような復興が速いスピードで行われた場所を見ることで、復興への意識付けも行われている。「死」という問題はオープンにされず、個人の問題として隠されがちである。震災以後、復興という思いが先行し、どうしても過去の悲しみを語る機会が少なくなりがちな被災地において、あえて全員に公表し、分かち合っている。それが当該地の特質であり、深い傷を負っている住民に生活のペースをあわせ生活しているともいうことができる。

笑って生きていき、箱塚桜を、閑上上町地区の住民として変わらず生きていくこと、それ自体が震災で亡くなった人への供養、弔いにつながっていくのだ。それはこれから先始まる新たなまちづくり、閑上上町地区の「再出発」と呼ぶことができるであろう。

以上のことから当該地がなぜ生活の基盤をコミュニティの理想像、言ってしまうと過剰すぎるくらいにコミュニティに自ら生活の基盤を置いたのは、仮設住宅の自治会活動を2年間という限定されたコミュニティと捉えるのではなく、これから先の復興、そして供養のために、住民が同じ方向へ歩み出す為に、箱塚桜団地はコミュニティが必要であった。そのために、コミュニティをエンジンとして日々の生活を送っている。そしてこの「再出発」という意識が、今までのコミュニティとは特異的であり、震災により新たに見えてきた新しいコミュニティの要件理由の1つとして考えられる。

## 参考文献

- 浅井秀子・熊谷昌彦・樋口秀・内田伸, 2008, 「中山間地域の地震災害における仮設住宅居住者の住民意識に関する研究」, 『学術講演梗概集』 E-2: 559-560
- 植田今日子, 2009, 「ムラの「生死」をとわれた被災コミュニティの回復条件—中越地震被災集落・新潟県旧山古志村榎木集落の人びとの実践から」, 『ソシオロジ』 54 (2): 19-35
- 野田隆, 1999, 「コミュニティとしての仮設住宅」岩崎信彦・鶴飼孝造・辻勝次・似田貝香門・野田隆・山本剛郎編『阪神・淡路大震災の社会学 第2巻 避難生活の社会学』, 昭和堂, 293-308
- 大脇兵七, 『閑上浜の伝説』
- 大脇兵七, 2011, 「宝塚市社会福祉大会資料」
- 大脇兵七, 『好きです閑上 閑上歴史の一端をひもどく』
- 加藤史絵奈・山家京子・亀田昌宏・佐々木一晋, 2010, 「鎌倉市大町地区におけるコミュニティ支援を意図したワークショップの実践と課題: その2 回覧板ネットワークを用いたご近

- 所情報共有の試み」, 『学術講演梗概集』F-1: 233-234
- 高橋知香子・塩崎賢明・堀田祐三子, 2005, 「応急仮設住宅と災害復興公営住宅における孤独死の実態と居住環境に関する研究」, 『学術講演梗概集』F-1: 1513-1514
- 鳥越皓之, 2008, 『サザエさんのコミュニティの法則』, NHK 出版
- 鳥越皓之, 1983, 「地域生活の再編と再生」松本通晴編, 『地域生活の社会学』世界思想社 160-186
- 鳥越皓之, 2002, 「コミュニティ政策の課題と市民の位置」佐々木毅他編『公共哲学: 第7巻』
- 鳥越皓之, 1975, 「行政上の区域設定と生活組織の対応」『佛科大学社会学部論叢』9: 21-42
- 鳥越皓之, 1994, 『地域自治会の研究』, ミネルヴァ書房
- 長谷川崇・岩佐明彦・新海俊一・篠崎正彦・安武敦子・小林健一・宮越敦, 2007, 「応急仮設住宅における居住環境の改変とその支援—「仮設カフェ」による実践的研究—」, 『日本建築学会計画系論文集』622: 9-16
- 林春男・重川希志依・田中聡, 2009, 『防災の決め手「災害エスノグラフィー」—阪神・淡路大震災秘められた証言』, 日本放送出版協会, 80-81
- 松井克浩, 2011, 『震災復興の社会学 2つの「中越」から「東日本」へ』, リベルタ出版, 120-140
- 吉本隆明, 1985, 『死の位相学』, 潮出版社
- ジーン・レイヴ, エティエンヌ・ウエンガー著, 佐伯胖訳, 1993, 『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』, 産業図書, 9-12
- 宮城県名取市 HP <http://www.city.natori.miyagi.jp/>  
名取市震災復興計画 (平成 23 年 9 月 1 日)  
<http://www.city.natori.miyagi.jp/content/download/11759/74396/file/fukkokeikaku-siryō.pdf>
- 宮城県／震災被害情報: 地震被害等状況及び避難状況 (平成 24 年 1 月 4 日)  
<http://www.pref.miyagi.jp/kikitaisaku/higasinihondaisinsai/higaizyokyou.htm>